

本書の構成と利用法

■本書の構成

この問題集は、全国の国公立大の試験問題から精選した二十題の良問を、ジャンル別に配列した、記述トレーニング用の問題集です。

各問題の解答・解説は、駿台予備学校現代文科講師が新規に書き下ろしています。これに、各大学の試験時間・配点をもとに割り出した〈制限時間・配点〉や、難易度の目安（★☆☆標準レベル・★★☆やや難レベル・★★★難レベル）、さらに〈採点基準〉を加え、実戦的な練習ができるよう編集しています。

ここに収められた二十題（評論十二題・随筆四題・小説四題）に取り組むことで、国公立大を突破するために必要な、文章読解力と記述表現力を養い、志望校合格を果たされることを願ってやみません。

■本書の利用法

- ① まず、〈問題編〉の最初に示した〈制限時間〉内で、ひとりおり問題を解いてください。
——これは〈速く解く〉ための練習です。
- ② 次に、同じ問題について、時間を気にせず、もう一度じっくり読んでください。本文の理解が深まったところで、記述解答

についても、よりよい解答にできないかどうか、考え方直してみましょう。

——これは〈きちんと考えて解く〉ための練習です。①と②とをくりかえすうちに、二つの力が結びつき、〈速く、きちんとと考えて解く〉ことができるようになります。

③ 最後に、〈解説編〉を見て、〈解答・採点基準・解説〉を参考に、自分の答案を採点・添削してみましょう。

——これは、自分の答案の欠点を自分で見つけ、修正する練習です。この練習をくりかえし、〈自分の答案を添削する力〉をつけてゆくことが、つまりは記述表現力を高めることになります。よりよい答案を書く力とは、試験時間中に自分の答案を（頭の中で）添削できる力なのですから。

④ 漢字などの知識設問で誤ったものについては、その日のうちに復習し、覚えておくようにしましょう。読解設問については、しばらく日をおいて（解答・解説の内容を忘れかけたころに）もう一度同じ手順でやり直してみるのが効果的です。

——各問題の本文は、いずれも入試頻出のテーマ・主題を扱ったものです。したがって、本文自体をくりかえし読み、テーマ・主題についての理解を深めることも、意義のある復習となるでしょう。

目次

評論

隨筆

1	日本人の発想、日本語の表現	森田 良行	1 風土と哲学——日本民衆思想の基底へ——内山 節
2	グローバリゼーションと日本文化	河合 隼雄	2 芝刈
3	小説	寺田 寅彦	3 母の声、川の匂い
4	逆説思考	川田 順造	4 茶番に寄せて
5	生きるための経済学	坂口 安吾	5 勇士の歌
6	情報社会と人間	安富 歩	6 風の又三郎
7	いま哲学とはなにか	桂木 隆夫	7 こうばしい日々
8	言葉によつて言葉に逆らう	岩田 靖夫	8 星々の舟
9	名前と人間	田中 公房	9 燃ゆる頬
10	友だち地獄	安部 克彦	10 風の又三郎
11	風景の哲学	土井 隆義	11 こうばしい日々
12	貨幣論	岩井 信留	12 星々の舟
		納富 克人	13 燃ゆる頬
		桂木 隆夫	14 風の又三郎
		岩田 靖夫	15 こうばしい日々
		田中 公房	16 星々の舟
		安部 克彦	17 燃ゆる頬
		土井 隆義	18 風の又三郎
		岩井 信留	19 こうばしい日々
		納富 克人	20 星々の舟
		桂木 隆夫	21 燃ゆる頬
		岩田 靖夫	22 風の又三郎
		田中 公房	23 こうばしい日々
		安部 克彦	24 星々の舟
		土井 隆義	25 燃ゆる頬
		岩井 信留	26 風の又三郎
		納富 克人	27 こうばしい日々
		桂木 隆夫	28 星々の舟
		岩田 靖夫	29 燃ゆる頬
		田中 公房	30 風の又三郎
		安部 克彦	31 こうばしい日々
		土井 隆義	32 星々の舟
		岩井 信留	33 燃ゆる頬
		納富 克人	34 風の又三郎
		桂木 隆夫	35 こうばしい日々
		岩田 靖夫	36 星々の舟
		田中 公房	37 燃ゆる頬
		安部 克彦	38 風の又三郎
		土井 隆義	39 こうばしい日々
		岩井 信留	40 星々の舟
		納富 克人	41 燃ゆる頬
		桂木 隆夫	42 風の又三郎
		岩田 靖夫	43 こうばしい日々
		田中 公房	44 星々の舟
		安部 克彦	45 燃ゆる頬
		土井 隆義	46 風の又三郎
		岩井 信留	47 こうばしい日々
		納富 克人	48 星々の舟
		桂木 隆夫	49 燃ゆる頬
		岩田 靖夫	50 風の又三郎
		田中 公房	51 こうばしい日々
		安部 克彦	52 星々の舟
		土井 隆義	53 燃ゆる頬
		岩井 信留	54 風の又三郎
		納富 克人	55 こうばしい日々
		桂木 隆夫	56 星々の舟
		岩田 靖夫	57 燃ゆる頬
		田中 公房	58 風の又三郎
		安部 克彦	59 こうばしい日々
		土井 隆義	60 星々の舟
		岩井 信留	61 燃ゆる頬
		納富 克人	62 風の又三郎
		桂木 隆夫	63 こうばしい日々
		岩田 靖夫	64 星々の舟
		田中 公房	65 燃ゆる頬
		安部 克彦	66 風の又三郎
		土井 隆義	67 こうばしい日々
		岩井 信留	68 星々の舟
		納富 克人	69 燃ゆる頬
		桂木 隆夫	70 風の又三郎
		岩田 靖夫	71 こうばしい日々
		田中 公房	72 星々の舟
		安部 克彦	73 燃ゆる頬
		土井 隆義	74 風の又三郎
		岩井 信留	75 こうばしい日々
		納富 克人	76 星々の舟
		桂木 隆夫	77 燃ゆる頬
		岩田 靖夫	78 風の又三郎
		田中 公房	79 こうばしい日々
		安部 克彦	80 星々の舟
		土井 隆義	81 燃ゆる頬
		岩井 信留	82 風の又三郎
		納富 克人	83 こうばしい日々
		桂木 隆夫	84 星々の舟
		岩田 靖夫	85 燃ゆる頬
		田中 公房	86 風の又三郎
		安部 克彦	87 こうばしい日々
		土井 隆義	88 星々の舟
		岩井 信留	89 燃ゆる頬
		納富 克人	90 風の又三郎
		桂木 隆夫	91 こうばしい日々
		岩田 靖夫	92 星々の舟
		田中 公房	93 燃ゆる頬
		安部 克彦	94 風の又三郎
		土井 隆義	95 こうばしい日々
		岩井 信留	96 星々の舟
		納富 克人	97 燃ゆる頬
		桂木 隆夫	98 風の又三郎
		岩田 靖夫	99 こうばしい日々
		田中 公房	100 星々の舟
		安部 克彦	101 燃ゆる頬
		土井 隆義	102 風の又三郎
		岩井 信留	103 こうばしい日々
		納富 克人	104 星々の舟
		桂木 隆夫	105 燃ゆる頬
		岩田 靖夫	106 風の又三郎
		田中 公房	107 こうばしい日々
		安部 克彦	108 星々の舟
		土井 隆義	109 燃ゆる頬
		岩井 信留	110 風の又三郎
		納富 克人	111 こうばしい日々
		桂木 隆夫	112 星々の舟
		岩田 靖夫	113 燃ゆる頬
		田中 公房	114 風の又三郎
		安部 克彦	115 こうばしい日々
		土井 隆義	116 星々の舟
		岩井 信留	117 燃ゆる頬
		納富 克人	118 風の又三郎
		桂木 隆夫	119 こうばしい日々
		岩田 靖夫	120 星々の舟
		田中 公房	121 燃ゆる頬
		安部 克彦	122 風の又三郎
		土井 隆義	123 こうばしい日々
		岩井 信留	124 星々の舟
		納富 克人	125 燃ゆる頬
		桂木 隆夫	126 風の又三郎
		岩田 靖夫	127 こうばしい日々
		田中 公房	128 星々の舟
		安部 克彦	129 燃ゆる頬
		土井 隆義	130 風の又三郎
		岩井 信留	131 こうばしい日々
		納富 克人	132 星々の舟
		桂木 隆夫	133 燃ゆる頬
		岩田 靖夫	134 風の又三郎
		田中 公房	135 こうばしい日々
		安部 克彦	136 星々の舟
		土井 隆義	137 燃ゆる頬
		岩井 信留	138 風の又三郎
		納富 克人	139 こうばしい日々
		桂木 隆夫	140 星々の舟
		岩田 靖夫	141 燃ゆる頬
		田中 公房	142 風の又三郎
		安部 克彦	143 こうばしい日々
		土井 隆義	144 星々の舟
		岩井 信留	145 燃ゆる頬
		納富 克人	146 風の又三郎
		桂木 隆夫	147 こうばしい日々
		岩田 靖夫	148 星々の舟
		田中 公房	149 燃ゆる頬
		安部 克彦	150 風の又三郎
		土井 隆義	151 こうばしい日々
		岩井 信留	152 星々の舟
		納富 克人	153 燃ゆる頬
		桂木 隆夫	154 風の又三郎
		岩田 靖夫	155 こうばしい日々
		田中 公房	156 星々の舟
		安部 克彦	157 燃ゆる頬
		土井 隆義	158 風の又三郎
		岩井 信留	159 こうばしい日々
		納富 克人	160 星々の舟
		桂木 隆夫	161 燃ゆる頬
		岩田 靖夫	162 風の又三郎
		田中 公房	163 こうばしい日々
		安部 克彦	164 星々の舟
		土井 隆義	165 燃ゆる頬
		岩井 信留	166 風の又三郎
		納富 克人	167 こうばしい日々
		桂木 隆夫	168 星々の舟
		岩田 靖夫	169 燃ゆる頬
		田中 公房	170 風の又三郎
		安部 克彦	171 こうばしい日々
		土井 隆義	172 星々の舟
		岩井 信留	173 燃ゆる頬
		納富 克人	174 風の又三郎
		桂木 隆夫	175 こうばしい日々
		岩田 靖夫	176 星々の舟
		田中 公房	177 燃ゆる頬
		安部 克彦	178 風の又三郎
		土井 隆義	179 こうばしい日々
		岩井 信留	180 星々の舟
		納富 克人	181 燃ゆる頬
		桂木 隆夫	182 風の又三郎
		岩田 靖夫	183 こうばしい日々
		田中 公房	184 星々の舟
		安部 克彦	185 燃ゆる頬
		土井 隆義	186 風の又三郎
		岩井 信留	187 こうばしい日々
		納富 克人	188 星々の舟
		桂木 隆夫	189 燃ゆる頬
		岩田 靖夫	190 風の又三郎
		田中 公房	191 こうばしい日々
		安部 克彦	192 星々の舟
		土井 隆義	193 燃ゆる頬
		岩井 信留	194 風の又三郎
		納富 克人	195 こうばしい日々
		桂木 隆夫	196 星々の舟
		岩田 靖夫	197 燃ゆる頬
		田中 公房	198 風の又三郎
		安部 克彦	199 こうばしい日々
		土井 隆義	200 星々の舟
		岩井 信留	201 燃ゆる頬
		納富 克人	202 風の又三郎
		桂木 隆夫	203 こうばしい日々
		岩田 靖夫	204 星々の舟
		田中 公房	205 燃ゆる頬
		安部 克彦	206 風の又三郎
		土井 隆義	207 こうばしい日々
		岩井 信留	208 星々の舟
		納富 克人	209 燃ゆる頬
		桂木 隆夫	210 風の又三郎
		岩田 靖夫	211 こうばしい日々
		田中 公房	212 星々の舟
		安部 克彦	213 燃ゆる頬
		土井 隆義	214 風の又三郎
		岩井 信留	215 こうばしい日々
		納富 克人	216 星々の舟
		桂木 隆夫	217 燃ゆる頬
		岩田 靖夫	218 風の又三郎
		田中 公房	219 こうばしい日々
		安部 克彦	220 星々の舟
		土井 隆義	221 燃ゆる頬
		岩井 信留	222 風の又三郎
		納富 克人	223 こうばしい日々
		桂木 隆夫	224 星々の舟
		岩田 靖夫	225 燃ゆる頬
		田中 公房	226 風の又三郎
		安部 克彦	227 こうばしい日々
		土井 隆義	228 星々の舟
		岩井 信留	229 燃ゆる頬
		納富 克人	230 風の又三郎
		桂木 隆夫	231 こうばしい日々
		岩田 靖夫	232 星々の舟
		田中 公房	233 燃ゆる頬
		安部 克彦	234 風の又三郎
		土井 隆義	235 こうばしい日々
		岩井 信留	236 星々の舟
		納富 克人	237 燃ゆる頬
		桂木 隆夫	238 風の又三郎
		岩田 靖夫	239 こうばしい日々
		田中 公房	240 星々の舟
		安部 克彦	241 燃ゆる頬
		土井 隆義	242 風の又三郎
		岩井 信留	243 こうばしい日々
		納富 克人	244 星々の舟
		桂木 隆夫	245 燃ゆる頬
		岩田 靖夫	246 風の又三郎
		田中 公房	247 こうばしい日々
		安部 克彦	248 星々の舟
		土井 隆義	249 燃ゆる頬
		岩井 信留	250 風の又三郎
		納富 克人	251 こうばしい日々
		桂木 隆夫	252 星々の舟
		岩田 靖夫	253 燃ゆる頬
		田中 公房	254 風の又三郎
		安部 克彦	255 こうばしい日々
		土井 隆義	256 星々の舟
		岩井 信留	257 燃ゆる頬
		納富 克人	258 風の又三郎
		桂木 隆夫	259 こうばしい日々
		岩田 靖夫	260 星々の舟
		田中 公房	261 燃ゆる頬
		安部 克彦	262 風の又三郎
		土井 隆義	263 こうばしい日々
		岩井 信留	264 星々の舟
		納富 克人	265 燃ゆる頬
		桂木 隆夫	266 風の又三郎
		岩田 靖夫	267 こうばしい日々
		田中 公房	268 星々の舟
		安部 克彦	269 燃ゆる頬
		土井 隆義	270 風の又三郎
		岩井 信留	271 こうばしい日々
		納富 克人	272 星々の舟
		桂木 隆夫	273 燃ゆる頬
		岩田 靖夫	274 風の又三郎
		田中 公房	275 こうばしい日々
		安部 克彦	276 星々の舟
		土井 隆義	277 燃ゆる頬
		岩井 信留	278 風の又三郎
		納富 克人	279 こうばしい日々
		桂木 隆夫	280 星々の舟
		岩田 靖夫	281 燃ゆる頬
		田中 公房	282 風の又三郎
		安部 克彦	283 こうばしい日々
		土井 隆義	284 星々の舟
		岩井 信留	285 燃ゆる頬
		納富 克人	286 風の又三郎
		桂木 隆夫	287 こうばしい日々
		岩田 靖夫	288 星々の舟
		田中 公房	289 燃ゆる頬
		安部 克彦	290 風の又三郎
		土井 隆義	291 こうばしい日々
		岩井 信留	292 星々の舟
		納富 克人	293 燃ゆる頬
		桂木 隆夫	294 風の又三郎
		岩田 靖夫	295 こうばしい日々
		田中 公房	296 星々の舟
		安部 克彦	297 燃ゆる頬
		土井 隆義	298 風の又三郎
		岩井 信留	299 こうばしい日々
		納富 克人	300 星々の舟

◇◇問題出典◇◇

評論 1 和歌山大学
隨筆 1 信州大学
小説 1 富山大学
隨筆 3 筑波大学
小説 3 佐賀大学
隨筆 7 大阪市立大学
小説 10 金沢大学
隨筆 4 徳島大学
小説 4 お茶の水女子大学
隨筆 11 宇都宮大学
小説 8 静岡大学
隨筆 5 横浜市立大学
小説 5 秋田大学
隨筆 12 広島大学
小説 2 琉球大学
隨筆 2 岡山大学
小説 3 千葉大学

隨筆4

「茶番に寄せて」 坂口安吾

★★★
50分
50点

佐賀大
解説83ページ

次の文章を読んで後の問い合わせに答えなさい。

日本には傑れた道化芝居が殆んど公演されたためしがない。文学の方でも、井伏鱒二という特異な名作家が存在はするが、一般に、批評家も作家も、編集者も読者もゲンシュクで、笑うことを好みという風がある。

僕はさきごろ「文体」編集の北原武夫から、思いきった戯作を書いてみないかという提案を受けた。かねて僕は戯作を愛し、落語であれ、漫才であれ、インチキレビュウの脚本であれ、頼まれれば、白昼も芸術として堂々通用のできるものを書いてみせるとタイゲンソウゴしていたことがあるものだから、紙面を書いてくれる気持になつたのである。北原の意は有難いが、読者がそこまでついてきてくれるかどうかは疑わしい。けれども僕は、そのうち、思いきった戯作を書いて、読者に見参するつもりである。

笑いは不合理を母胎にする。笑いの豪華さも、その不合理とか無意味のうちにがあるのであろう。ところが何事も合理化せずにいられぬ人々が存在して、笑いも亦合理的でなければならぬと考える。無意味なものにゲラゲラ笑つて愉しむことができないのである。そして、喜劇には諷刺がなければならないという考えをもつ。

しかし、諷刺は、笑いの豪華さに比べれば、極めて貧困なものである。諷刺する人の優越がある限り、諷刺の足場はいつも危く、その正体は貧困だ。諷刺は、諷刺される物と対等以上であり得ないが、それが揶揄という正当ならぬ方法を用い、すでに自ら不当に高く構えこんでいる点で、物言わぬ諷刺の対象がいつも勝を占めている。

諷刺にも優越のない場合がある。諷刺者自身が同時に諷刺される者の側へ参加している場合がそうで、また、諷刺がキヨムへ渡る橋にすぎない場合がそうだ。これらの場合は、諷刺の正体がすでに不合理に属しているから、もはや諷刺と言えないだろう。諷刺は本来笑いの合理性を捉とし、そこをフミハズしてはならないのである。

道化の国では、警視総監が泥棒の親分だつたりする。そのとき、警視総監の揶揄にとどまるものを諷刺という。即ち諷刺は対象への否定から出発する。これは道化の邪道である。むしろ贋物にせものなのである。

正しい道化は人間の存在自体が孕んでいる不合理や矛盾の肯定からはじまる。警視総監が泥棒であつても、それを否定し揶揄するのではなく、そのような不合理自体を、合理化しきれないゆえに、肯定し、丸呑みにし、笑いという豪華なマジユツによつて、有耶無耶のうちにそつくり昇天させようというのである。合理の世界が散々もてあました不合理を、もはや精根つきはてたので、突然不合理のまま丸呑みにして、笑いとばして「了おう」というわけである。

だから道化の本来は合理精神の休息だ。そこまでは合理の法でどうにか捌きさばがついてきた。ここから先は、もう、どうにもならぬ。——という、ようやつと持ちこたえてきた合理精神の歯をくいしばつたジユウメンが、笑いの国では、突然赤裸あかはんひとつになつて、裸踊りをしているようなものである。それゆえ、笑いの高さ深さとは、笑いの直前まで、合理精神が不合理を合理化しようとしてどこまで努力してきたか。そうして、到頭とうとう、どの点で兜かぶとを脱いで投げ出してしまつたかという程度による。

だから道化は戦い敗れた合理精神が、完全に不合理を肯定したときである。即ち、合理精神の悪戦苦闘を経験したことのない超人と、合理精神の悪戦苦闘に疲れ乍らも決して休息を欲しない超人だけが、道化の笑いに鼻もひつかけずに済まされるのだ。道化はいつもその一步手前のところまでは笑つていない。そこまでは合理の国で悪戦苦闘していたのである。突然ほうりだしたのだ。もしやくしゃして、原料のまま、不合理を突きだしたのである。

道化は昨日は笑つていない。そうして、明日は笑つていない。一秒さきも一秒あとも、もう笑つていないが、道化芝居のあいだだけは、笑いのほかには何物もない。涙もないし、揶揄もないし、凄味すごみなどというものもない。裏に物を企たてらんでいる大それたコンターンは微塵みじんもないのだ。ひそかに裏に諷刺しているしみつたれた精神もない。だから道化はジユンスイな休みの時間だ。昨日まで嘗々と貯めこんだ百万円を、突然バラまいてしまう時である。惜しげもなく底をはたく時である。

問 1 傍線部アーケのカタカナを漢字に直しなさい。

問 2 傍線部 A 「喜劇には諷刺がなければならない」という考えをもつ」とあるが、何故、そのような考えをもつのか。「笑いは不合理を母胎にする」と述べていることに注意して説明しなさい。

問 3 傍線部 B 「諷刺は、笑いの豪華さに比べれば、極めて貧困なもの」とあるが、何故、諷刺はそのようなものであるのか。「諷刺にも優越のない場合がある」と述べている点に注意しながら説明しなさい。

問 4 傍線部 C 「道化の邪道」とはどういうことか。「諷刺は対象への否定から出発する」と述べている点に注意して説明しなさい。

問 5 傍線部 D の意味するところを、「合理精神」という語を使って説明しなさい。

問 6 文章全体を読んであなたの意見を述べなさい。

隨筆4

「茶番に寄せて」坂口安吾

得点

点

問
1

オ ア

力 イ

キ ウ

ク エ

問
3

問
2

Sample

問
6

問
5

問
4

A large, faint watermark reading "Sample" is positioned diagonally across the page. The text is in a light gray, serif font. The "S" is at the bottom left, and the "e" is at the top right. The watermark is oriented from the bottom-left towards the top-right. The background of the page features a grid of thin, dark gray vertical lines spaced evenly across the entire area.

隨筆4 「茶番に寄せて」 坂口安吾

解
答

問1

ア＝嚴肅 イ＝大言壯語 ウ＝虚無 エ＝踏（み）外（し）

オ＝魔術 カ＝渋面 キ＝魂胆 ク＝純粹

問2

全てを合理化して考えたがる人は、笑いの持つ不合理や無意味さを認めようとせず、諷刺として合理化することで、初めて喜劇に価値を見出すから。

問3

人間存在の孕む不合理や矛盾を、全てそのままに肯定する笑いの豊かさに対し、諷刺は自らも内包しうる不合理性を認めず、合理の世界で対象への優越性に自己満足しているだけだから。

問4

合理性に基づいて対象を否定することから始まる諷刺は、人間存在の孕む不合理や矛盾への肯定から出発する道化本来のあり方から外れているということ。

問5 合理精神が不合理を合理化しようと努力を重ね、ついに立ち行かなくなつたとき、いきなりその不合理を完全に肯定し、笑いとばすのが道化だということ。

問6 人間は本来矛盾や不合理を孕む存在である。しかし現代社会はそのことへの寛容を失つてゐるのではないだろうか？ 経済的合理主義に全ての人間を組み込んでいく近代文明は、そうしえぬものを排除する構造を持つ。そのことが招く精神の荒廃が、ときに凄惨な事件を引き起こしてもいる。合理化の限界を認め、人間本来のあり方に

立ち返る契機となる道化のあり方を、各人がその身に引き受けしていくことが、心にゆとりを取り戻させ、社会全体を豊かにする一つの処方箋になるように私には思えてならない。

配点・採点基準 (50点)

問1 (各1点)

◇①〈全てを合理化して考えたがる人〉という要素…2点

▼〈全て〉を欠くもの、マイナス1点。

②〈笑いの持つ不合理や無意味さを認めようとせず〉という要素…2点

▼〈不合理〉と〈無意味さ〉片方でも可。

▼〈笑いも亦合理的でなければならぬ〉で書いたものも可。

③〈諷刺として合理化することで、初めて喜劇に価値を見出す〉という要素…4点

▼前半は〈諷刺は本来笑いの合理性を捉とし〉を使って書いてても可。〈諷刺〉の〈合理性〉について言及があればよい(②とは〈合理性〉が〈笑い〉について書かれたものか、〈諷刺〉についてかで区別する)。〈初めて喜劇に価値を見出す〉の要素を欠くものはマイナス2点。

▼末尾が理由説明に対応していないもの…マイナス1点。

問3 (9点)

◇①〈人間存在の孕む不合理や矛盾を、全てそのままに肯定する笑いの豊かさ〉という要素…3点

▼〈不合理〉と〈矛盾〉片方でも可。〈笑いは不合理を肯定する（母胎にする）〉という意味あいがあればよい。

▼〈全て〉と〈そのままに〉は片方で可だが、どちらの要素も欠くものの、

マイナス 1 点。

② 〈諷刺は自らも内包しうる不合理性を認めず〉 という要素…2 点

▼ 〈諷刺者自身が同時に諷刺される者の側へ参加している〉 や 〈諷刺がキヨムへ渡る橋にすぎない〉 で書いたものはマイナス 1 点。〈諷刺の正体がすでに不合理に属している〉 も、わかりづらく使われている場合、表現未熟としてマイナス 1 点。

③ 〈合理的世界で対象への優越性に自己満足しているだけ〉 という要素…4 点

▼ 〈合理的世界で……自己満足する〉 という内容が必須。同内容は広く認める。

▼ 〈優越〉 の要素を欠くもの、マイナス 2 点。

▼ 末尾が理由説明に対応していないもの…マイナス 1 点。

問 4 (6 点)

◇ ① 〈合理性に基づいて対象を否定することから始まる諷刺〉 の要素…2 点

▼ 〈合理性〉 〈対象への否定から出発する〉 両方の要素が必須。

② 〈道化は〉 人間存在の孕む不合理や矛盾への肯定から出発する〉 という要素…2 点

▼ 〈人間の持つ不合理を肯定する〉 という意味あいのあることが必須。

▼ 〈不合理〉 と 〈矛盾〉 片方のもの、マイナス 1 点。

③ 〈道化本来のあり方から外れている〉 という要素…2 点

▼ 〈邪道〉 を適切に言い換えてあれば可。

問 5 (9 点)

◇ ① 〈合理精神が不合理を合理化しようと〉 という要素…3 点

▼ 指定語句である 〈合理精神〉 は他の箇所で使われていても可。

② 〈努力を重ね、ついに立ち行かなくなつたとき〉 という要素…2 点

▼ 〈ここから先はどうにもならぬ〉 〈もはや精根つきはてた〉 など、〈ぎりぎりまで努力した〉 というニュアンスがあれば可。

問 6 (10 点)

◇ ① 人間の持つ「不合理や矛盾」を、「合理化」しようと努力した果てに肯定する、「笑い」や「道化」に関する内容であることが必須…5 点

▼ 内容に応じて適宜減点。

② 自分の考えを論理的に展開し、結論を導き出していること…5 点

▼ 内容に応じて適宜減点。

▼ 表記・表現上の未熟は一箇所につきマイナス 1 ~ 2 点。

出典

坂口安吾「茶番に寄せて」(『散る日本』)一九七三年角川文庫)所収、『坂口安吾選集』(第一巻)・『日本文化私観』(一九九六年講談社文芸文庫)再録)の一節。

坂口安吾は、一九〇六年新潟県生まれ。東洋大学印度哲学科卒。太宰治や石川淳らと並んで無頼派の作家として知られる。戦後世相の退廃と堕落の中に、切ない倫理を模索する作品を数多く残している。『墮落論』『白痴』『桜の森の満開の下』『青鬼の褲を洗う女』等、著書多数。

解説

本文は全部で十の形式段落からなり(以下①~⑩と表記する)、内容上(1)序(1)~(2)、(2)笑いと諷刺(3)~(5)、(3)道化とは何か(6)~

③ 〈いきなりその不合理を完全に肯定し〉 という要素…2 点

▼ 〈丸呑みにする〉 〈そつくり昇天させる〉 など比喩表現を使つたものはマイナス 1 点。

▼ 〈いきなり〉 の要素を欠くもの、マイナス 1 点。

▼ 〈完全に〉 の要素を欠くもの、マイナス 1 点。

④ 〈笑いとばすのが道化だ〉 という要素…2 点

▼ 〈道化〉 を欠くものはマイナス 1 点だが、解答中のどこかに使われていれば可。

(10) の三つに分けて捉えることができる。以下順に内容を見ていく。

(1) 序 (1) (2)

▽ 文学の世界には笑いを好まないという風潮がある。

▽ 編集者から思い切った戯作を書いてみないかという提案を受けた。読者がついてきてくれるかは分からぬが、いつか実現して見参したいと思つてゐる。

(2) 笑いと諷刺 (3) (5)

▽ 笑いは不合理を母胎にする

▽ 笑いの豪華さも不合理や無意味のうちにある

▽ 何事も合理化せずにいられぬ人々

▼ 笑いも合理的でなければならぬと考える

▼ 喜劇には諷刺がなければならないという考え方をもつ

▽ 笑いの豪華さ

▽ 諷刺は極めて貧困である

▼ 諷刺する人の優越がある限り、諷刺の足場はもろく貧困

▼ 挪揄を用い自ら不當に高く構えこんでいる点で、諷刺の対象の方がいつも勝ちを占める

▽ 諷刺に優越のない場合

▼ 諷刺の正体がすでに不合理に属し

▼ 諷刺と言えない

▽ 諷刺は本来笑いの合理性を捉とする

(3) 道化とは何か (6) (10)

▽ 諷刺は対象への否定から出発するが、これは道化の邪道である。

▽ 正しい道化は人間の存在 자체が孕む不合理や矛盾の肯定からはじまる。

▽ 不合理 자체を合理化しきれないゆえに、肯定し、丸呑みにし、笑いという豪華なマジユツによつて、有耶無耶のうちにそつくり昇天させようというのが筆者の主張である。

▽ 合理の世界が散々もてあましに不合理を、もはや精根つきはてたので、突然不合理のまま丸呑みにして、笑いとばして了おうとするのが道化である。

▽ 道化の本来は合理精神の休息。

▽ 笑いの高さ深さとは、笑いの直前まで、合理精神が不合理を合理化しようとしてどこまで努力してきたかによる。

▽ 道化は戦いに敗れた合理精神が、完全に不合理を肯定したときである。

（ポイント2）

合理精神が不合理を合理化しようと努力した果てに、もはや立ち行かなくなつて、突然不合理を全てそのままに肯定して笑いとばすのが道化であり、その意味で道化は人間存在の孕む不合理や矛盾を肯定することから始まるのである、というのが（3）の要旨。（2）で述べた、「笑いは不合理と無意味のうちにある」という内容を受け、話題を「道化」へと展開している文章の流れを読み取ろう。

問1 ア「ゲンシユク」は「嚴肅」で「おごそかで、心が引き締まるさま」の意。「嚴」の訓は「おごそ（か）」。「肅」の字を間違わないよう注意すること。

イ「タイゲンソウゴ」は「大言壯語」で「できそつもないことや威勢のいいことを言うこと」の意。

ウ「キヨム」は「虚無」で「何も存在せず空虚なこと、価値のある本質的なものの存在しないこと」の意。ここでは「本質的な意味が何も存在しないこと」くらいの意で用いている。「虚」の訓は「むな（しい）」で「から、中味のないこと」の意を持つ。

エ「フミハズシ」は「踏み外し」。「踏み外す」は「踏みそこなう・常道や正道からはずれた行いをする」意。「踏」の音は「トウ」。「舞踏」「雜踏」「踏襲」「踏破」など。

オ「マジユツ」は「魔術」。「魔」の字を正しく書くこと。

カ「ジュウメン」は「渋面」で「不愉快そうな顔つき、しかめつづら」の意。「渋」の訓が「渋（い）」で、「面」の訓が「つら」なので、そこから意味を類推できるだろう。

キ「コンタン」は「魂胆」。「魂」の訓は「たましい」。「胆」の訓は「きも」で、こちらも「たましい」の意を持つ。つまり「魂胆」はもともと「たましい、きもつたま」の意。そこから「心の中に隠されたたくらみ、策略」の意に用いられるようになる。

ク「ジュンスイ」は「純粹」で「混じりけのないこと・けがれのないこと」の意。

▼笑いも合理的でなければならぬと考える

▼喜劇には諷刺がなければならぬという考えをもつ

…

△諷刺は本来笑いの合理性を捉とする

右図を見れば分かるように、笑いは本来「不合理や無意味のうちにあら」のだが、「何事も合理化せずにいられぬ人々」は「笑いも亦合理的でなければならぬ」と考え、「笑いの合理性を捉」とする諷刺があつて初めて「喜劇」にも意味があるとするのである。以上の内容をわかりやすくまとめていく。

問3 再び問題文の解説（2）から、解答に関わる箇所を再掲しよう。

△笑いは不合理を母胎にする

△笑いの豪華さも不合理や無意味のうちにある

△笑いの豪華さ

△諷刺は極めて貧困である

△諷刺は極めて貧困である

▼諷刺する人の優越がある限り、諷刺の足場はもろく貧困

▼揶揄を用い自ら不恰に高く構えこんでいる点で、諷刺

の対象の方がいつも勝ちを占める

▼諷刺に優越のない場合

▼諷刺の正体がすでに不合理に属し

諷刺と言えない

問2 問題文の解説（2）から解答に関わる箇所を再掲してみよう。

△笑いは不合理を母胎にする

△笑いの豪華さも不合理や無意味のうちにある

△何事も合理化せずにいられぬ人々

「笑いの豪華さ」は「不合理や無意味」、すなわち⑦でいう「合理化しきれない」「人間の存在自体が孕んでいる不合理や矛盾」を肯定することにあるのに、「諷刺」は「合理性を捉」して狭いレベルにとどまり、「諷刺」する対象より「自らを不適に高く構えこんで」、「優越」感に浸っているだけなので、「極めて貧困なもの」だと筆者は述べたのである。どんなに「優越」感に浸ろうと、「諷刺にも優越のない場合」があり、自らも「不合理に属」することもありうるのに、その可能性を認めようとはしない視野の狭さを筆者は批判しているのである。

問4 まずは傍線部の前後に着目する。「対象への否定から出発する」諷刺が「道化の邪道」であるなら、これと対立するものが「道化」の内容に相当すると考えればよい。そうすれば⑦の冒頭にある「文」「正しい道化は人間存在自体の孕んでいる不合理や矛盾の肯定からはじまる」が解答箇所として着目されてくるだろう。また問3で見たように、諷刺は「合理性を捉」とするため、この「不合理や矛盾を肯定」する「道化」とは相容れないのである。以上の内容をまとめていく。

問5 比喩表現に関する設問は、本文中のどういった内容に対する比喩なのかを読み解いていくのがポイント。傍線部Dにある「昨日まで嘗々と貯めこんだ百万円を、突然バラまいてしまう」のは、直前にあるようく「道化」の行動を指している。よって本文中の「道化」の説明に、同等の内容を求めていくことになる。⑨の最後に着目しよう。「道化は……合理的の國で悪戦苦闘していたのである。突然ほうりだしたのだ。もしやくしゃして、原料のまま、不合理を突きだしたのである」の「突然ほうりだ」ですが、傍線部の「突然バラまいてしまう」に対応している。つまりは「合理的」的に説明をつけようと努力した果てに、「突然」「不合理」のまま対象を「ほうりだ」してしまって、というのが傍線部の意味だということになる。それが分かれば、後はその内容に関する叙述を本文に求

めていけばよい。問題文の解説（3）から該当箇所を再掲してみよう。

▽不合理自体を合理化しきれないゆえに、肯定し、丸呑みにし、笑いとういう豪華なマジユツによつて、有耶無耶のうちにそつくり昇天させようというのが道化である。

▽合理的世界が散々もてあました不合理を、もはや精根つきはてたので、突然不合理のまま丸呑みにして、笑いとばして了おうとするのが道化である。

▽笑いの高さ深さとは、笑いの直前まで、合理精神が不合理を合理化しようとしてどこまで努力してきたかによる。

▽道化は戦いに敗れた合理精神が、完全に不合理を肯定したときである。こう並べてみると、同様の内容が何度も繰り返されていることが分かるだろう。指定語句である「合理精神」を必ず用い、比喩表現は使わぬよう注意して、右の内容をわかりやすくまとめていく。

問6 「人間存在自体の孕んでいる不合理や矛盾」を「合理化」の努力の果てに「肯定」する、「道化」や「笑い」に対する内容であることが必須。字数指定はないが、むだな繰り返しをしてだらだらといたずらに長く書いたり、本文を単になぞつただけのものになつたりしないよう注意しよう。筆者の論に対する肯定あるいは否定の意見を明確に出していくべきだ。全体を〈序・本・結〉〈起・承・転・結〉などの形で構成していくことも重要。